

# へちまの水

小川未明

青空文庫



山へ雪がくるようになると、ひよどりが裏の高いかしの木に鳴くのであります。正雄は、縁側にすわつて、切つてきた青竹に小さな穴をあけていました。

「清ちゃんのより、よく鳴る笛を造つてみせるぞ。そして、二人で林へいつて、やまがらを呼ぶんだ。」

彼は、独り言をしながら、注意深く、細い竹に小刀で穴をあけていたのです。しかし、若竹で柔らかくて、うまく思うようにいかなかったのです。庭のすみに、寒竹が生えていました。正雄は、庭に降りて、寒竹を切ろうとしたのです。

「あつ、それを切つては、だめよ。お父さんが、大事にしていな

さるのだから。」と、姉あねのとよ子こが見みつけていいました。

「やはり清せいちゃんのところへいつて、聞きいてこよう。」

まさお  
正雄まさおは、駈かけ出だしました。

「清せいちゃん、どこに、そんな竹たけがあつたの。」

「君きみ、この竹たけは、枯からしてあるんだぜ。釣つりざおにするつて、福ふくちゃんのおじさんが、取とつておいたのだけれど、先さきが折おれたからといつて、僕ぼくにくれたのだ。こんないい竹たけは、どこを採さがしたつて、あるものか。」

「僕ぼくも、そんな竹たけが、ほしいなあ。」

「君きみも笛ふえを造つくるのかい。そんなら、残のこっている竹たけをあげよう。そして、穴あなをあけたら、後あとで、針はり金がねで中なかを一度ど通とおすといひよ。」

清せいちゃんちゃんは、短みじかい竹たけと、針はり金がねを持もつてきて渡わたしました。

「ありがとう。できたら、林はやしへいって、二人ふたりで、小鳥ことりを呼よび寄よせる、競きよう争そうをしようじやないか。」と、正雄まさおは、いいました。

「それには、お寺てらの林はやしがいいよ。あすこには、やまがらも、こがらも、くるから。」と、清せいちゃんちゃんが、いいました。正雄まさおは、いい竹たけが手てに入はいると喜よろんで、家いえへもどつてきました。

また、もとの場所ばしょへすわつて、笛ふえを造つくりにかかりました。

「清せいちゃんちゃんのところへいって、いい竹たけをもらつてきた。」と、姉ねえさんに、いいました。

姉あねのとよ子こは、弟おとうとが、小刀こがたなを使つかう手てつきを見みていたが、

「もう、正雄まさおは、あかぎれができたのね。伯母おばさんさんの家いえへいって、

へちまの水みずをもらつてくるといいわ。」といいました。

毎年まいとしふゆ冬になると、伯母おばさんの家いえへ、へちまの水みずをもらいにい

くのでありました。

「こんどの日曜にちようにいつて、かきも、もらつてこよう。」

正雄まさおは、そういいながら、笛ふえを造つくつていましたが、そのうちに、

かわいらしい管笛くだふえができ上ありました。口くちにあてて、息いきをすい、

すいと通とおしているうちに、パイ、パイ、ピーと澄すんだ、いい音ねが

出でました。

「姉ねえちゃん、よく鳴なるだろう。」と、さも、うれしそうです。こ

のとき、また、高たかいかしの木きの先刻さつきのひよどりが、飛とんできて鳴な

いたのであります。

「どれ、清ちゃんせいと、林へはやしいって、やまがらを呼よぼうや。」と、  
 正雄まさおは、また駈かけ出だしました。いつしか、楽たのしい秋あきも過すぎ、雪ゆきの  
 降ふる冬ふゆがきましました。正雄まさおは、学がっこう校がっこうの帰かえりに雪ゆき合がっせん戦せんをしたり、  
 雪ゆきの上うえで、相すもう撲とを取とつたりししたのです。

それは、はや去きよ年ねんのこととなつて、今ことし年はるの春はる、正雄まさおは、小しょう  
 学がっこう校がっこうを卒そつぎ業ようしたのでありました。

雪ゆきが消きえて、黒くろ土つちの上うえに、ほこほこあたた暖たかな日ひの光ひかりの射さす、  
 春はるのことでした。

「姉ねえちゃん、どこへ、へちまの種たね子をままごうか。」と、正雄まさおは、  
 紙かみに包つつんだ、白しろい種たね子たねを出だして、ききました。

「へちまの種たね子たねなの。」

「伯母さんが、おまえの手は荒れ性だから、今年から自分の家でも、へちまの水を取るといいといったんだよ。」

「そう、この垣根のところは、どうかしらん。」と、茂ったからたちの木の立っているところを指しました。

「つるが出たら、棒を立ててやっておくれよ。」

正雄は、町の工場へいくことになっていました。自分は、このへちまの芽を見るかもしれないが、つるの伸びる時分には、おそらく家になかろうと思つたのであります。

「おまえ、体がだいじょうぶ？ どうしても町へ行って働く気なの。」と、姉は、心配しました。

しかし、少年は、元気でした。非常時国家のために、り



つぱに 少年工の働きをしようと決心していたのです。

「だいじょうぶだよ。」

へちまの芽が出て、銀色のなよなよとしたつるが、姉の立  
た棒にはい上るころには、正雄は、町の工場で、機械のそばに立  
つて、働いていました。

彼女は、弟の身の上を案じました。あまり強いほうではない  
が、これから世の中の荒波にもまれていけるだろうか、へち  
まのつるを見るたびに思われるのでした。そして、米のとぎ汁や、  
魚を洗った水などを、へちまの根もとにかけてやりました。

ある日、とよ子は、へちまを見てびつくりしました。棒から、  
いつのまにかつるは、からたちの木に登っていました。鋭い刺の

ある枝を平気で、思うかつてのままに、ほうぼうへそのつるを拡げていたからです。

「あら、えらい勢いなね。」

彼女は、これを見て、につこりしました。弟だつて、なにも案ずることがないと、気強く感じられたのでした。

盛夏のころには、へちまは、まったくからたちを征服して、

電燈線にまで、手を伸ばしていました。その勢いは、さながら、

秋になってひよどりのくる、あの高い大きなかしの木と高さを競い、さらに大空に浮かぶ白い雲を捕らえようとしているのです。烈しい太陽が、その厚みのある葉に照り映えて、真っ黄色な花は、燃えるように見えました。

はたして秋あきになると、大きな実みがいくつもなつて、からたちの木きは、その重みおもで頭あたまを低く垂たれていました。これを見みながら姉あねは、今年ことしは、へちまの水みずをたくさん取とつて、寒さむさに向むかう前まえに、弟おとうとへ送おくつてやろうと思おもつたのでした。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「亀の子と人形」フタバ書院

1941（昭和16）年4月

初出：「北國新聞」

1941（昭和16）年2月5日

※表題は底本では、「へちまの水《みず》」となっています。

※初出時の表題は「絲瓜の水」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年6月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# へちまの水

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>